

世界遺産地域における農地の変遷と役割

Changes and Role of Agricultural Land in The World Heritages

氏名 佐々木 吾珠
英文氏名 Ami Sasaki

1. 序論

(1) 背景と目的

構成資産と緩衝地帯から成る世界遺産地域には、構成資産のみならず地域全体での保全と存続が求められている。農地はその構成要素の1つであるが、現在の生産システムを担う農地の評価には課題がある。特に世界文化遺産において、農地との結びつきは歴史的なものであり活発な生産システムとしての農業とは別のもので、観光商品とみなす傾向があるが、実際には現在の農地が地域に根付いた地域開発の可能性として有効であることが指摘されている (Karoline Daugstad et al., 2006)。日本では農業景観における研究に留まり、世界遺産地域の結びつきに注目して農地について分析した研究はない。

以上のことから、農地を世界文化遺産地域の構成要素として捉え、変遷と位置付けを把握し、農地の役割を考察することを本稿の目的とする。

(2) 研究方法

1) 構成資産及び緩衝地帯の農地面積の把握: QGISを用い、環境省 生物多様性センター 植生調査(2~5回/1983-1997: 期間1、6~7回/1998-2005: 期間2とする)から農地面積、農地割合、残存農地割合(1期を100%とした場合、2期に残る農地)を水田と畑に分けて算出し分析を行った。農地が確認できないか、構成資産が隣接しない複数の県に渡る世界文化遺産は、以降の分析の対象外とした。

2) 世界遺産地域における農地の位置付けを把握: 推薦書(和文)内の「農」のキーワードと、文脈の整理を行なった。結果を、登録年代に関わらず確認できた6つの項目(表1「推薦書」列参照)に整理した。入手可能なものは、包括的保存管理計画及びその策定との関わる参考資料(和文)について、同様の整理を行った。いずれも入手できない場合、SOC(State of Conservation report 英文)においてキーワード「agr」「field」「culti」を用いた。

3) 顕著な農地増加が見られ、推薦書の6項目全てと、現在の生業に対する記述が確認できた「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」について、農地増加を見せた久賀島の集落及び奈留島の江上集落の個別の保存管理計画等関連書類の整理と、五島市役所地域振興課文化観光部の文化財担当者2名にオンライン調査、及び質問表への記述回答を得た。

また、五島市農業振興計画と関連資料の世界遺産に対する記述を整理し、生産システムとして農地を評価する視点と世界遺産地域の結びつきを確認した。

2. 世界遺産地域の農地の変化

以下、世界遺産の名称は表のとおり省略して示す。表1から、分析対象とした14件の世界文化遺産において農地が確認できる。最も農地面積が大きいのは1期(55%)2期(32%)ともに平地に農業地域を持つ平泉の緩衝地帯だった。法隆寺、琉球、平泉、沖ノ島、長崎、百舌鳥は、緩衝地帯に平地農業地域を有し、1期に20%以上の農地を持つ。山間部での農地の減少、平地の農地整備による増減、市街地の拡大による農地減少という地形と土地利用の違いが、世界遺産地域ごとの特徴的な農地面積変化の要因となっていた。残存農地割合にみると、五箇山、平泉、長崎のみ構成資産の割合が高い。

3. 世界遺産地域における農地の位置付け

推薦書の記述を確認した世界遺産の全てで、景観の変容を防ぐ要素として「農地法」適用の記述があり、農地に景観地としての役割を期待していた。歴史との関わりが多い事例では、農地面積が大きい傾向があり、伝統を伝える役割に期待する記述が見られた。長崎のみ、現在の生活と結びつく農地の生産システムとしての役割に関する記述が見られた。建造物等が評価の対象であるため、農地の有無が必ず記述に結びつくわけではないが、包括的保存管理計画策定を日本が徹底した2014年以降、推薦書における農地の記述も増加した。同資料は2014年度以降に新たに策定されたものも多く、農地に対する具体的な記述が多い。推薦書で記述が少ない平泉も関連資産の農地について多くの記述がある。

(1) 世界遺産地域の農地変化と位置付けの関係

農地面積の分析期間は、全ての世界文化遺産の登録年とは一致しないため、登録による農地への影響が伺えるのは法隆寺から琉球までである。その中で農地の記述が多かった五箇山は山間部に位置し、農地面積が減少したが、農地の保全活動が記述されている構成資産内は、緩衝地帯よりも残存農地割合が高い。平泉は、緩衝地帯の農地面積が最も多く、農地整備により構成資産内の農地が増加した。登録は分析期間後であるため、農地整備による構成資産への負の影響を懸念しつつも理想的な眺望の構成要素

として農地を捉えているが、農地の保全等に関する記述は見られない。長崎では、2期の構成資産における農地割合が五箇山に次いで高く、残存割合も平泉に次いで最も高い。推薦書における農地の記述が最も多く、現在の生業に対する評価も確認できた。

(2) 長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産

久賀島・奈留島の資料からは、生業と構成資産の結びつきが多く記述されたが、質問表への回答等から、2006年からの世界遺産登録に向けた活動及び推薦書の記述は、あくまでも構成資産の評価を目的とし、直接的な農地の評価はしていない。しかし、農地に対する視点を獲得しており、農地には生業地を伝えることと、景観地としての役割を期待していた。

一方で、生産システムとしての農地を評価する農業振興計画と関連資料に、世界遺産地域との結びつきや視点を確認できる記述はなかった。

4. 結論と考察

(1) 結論

農地面積の変化は地形と土地利用の特徴が要因と

なり、推薦書の記述と農地の捉え方にも影響していた。構成資産の評価によって偏りはあるが、農地面積が多く、農地との結びつきがある世界遺産では、農地に期待する役割及び構成資産と関連して評価する記述が多く見られた。農地は世界遺産地域の中で特に構成資産との結びつきに関連して、景観地、生業伝承の要素として役割を期待されていた。

(2) 考察

農地は、構成資産との結びつきを評価されることで、今後、現在の生業地としての農地も評価される可能性があると考えられる。一方で、生産システムとしての視点からは、世界遺産地域との関わりの認知に至っていない可能性が高い。地域に根付く農地は、世界遺産地域の構成要素として、生産システムとしての評価が交わる要素として、地域全体の保全及び発展の鍵となる役割が期待できる。世界遺産地域全体の存続には、世界遺産地域と農地の関係性の把握及び、現在結びつきが希薄になっている場合は、その構築が重要である。

表1 推薦書における農地の記述と農地割合の関係

登録年	世界遺産略称	OUV	推薦書					農地割合		残存農地率		面積(km ²)	
			土地利用形態	法的保護状況	歴史	資産の保護状況	現在の農地	1期	2期	水田	畑		
1993	法隆寺	×	構成資産	×	×	×	×	×	0.8%	0.5%	58%	0%	0.20618
			緩衝地帯	×	×	×	×	×	24.7%	15.6%	74%	4%	5.57185
1994	京都	×	構成資産	×	×	×	×	×	0.4%	0.2%	65%	0%	8.02239
			緩衝地帯	×	×	×	×	×	1.0%	0.4%	67%	11%	36.44529
1994	五箇山	▲地区	構成資産	○	▲活動	○	○	○	37.2%	25.1%	74%	0%	0.76661
			緩衝地帯	×	×	×	×	×	1.5%	0.6%	55%	11%	539.06332
1996	厳島	×	構成資産	×	×	×	×	×	0.0%	0.0%	0%	0%	3.92789
			緩衝地帯	×	×	×	×	×	0.6%	0.3%	0%	43%	27.3247
1998	奈良	×	構成資産	×	×	×	×	×	1.6%	0.4%	26%	0%	5.30612
			緩衝地帯	×	×	×	×	×	15.3%	7.9%	49%	83%	20.0893
2000	琉球	×	構成資産	×	×	○	×	×	18.4%	4.2%	0%	0%	0.56531
			緩衝地帯	×	×	×	×	×	30.2%	13.8%	0%	46%	5.79664
2004	紀伊	×	構成資産	×	×	×	×	×	0.3%	0.0%	0%	0%	7.90576
			緩衝地帯	×	×	×	×	×	1.1%	0.3%	32%	22%	146.01356
2007	石見	×	構成資産	×	×	○	×	○	6.8%	3.0%	15%	0%	4.39085
			緩衝地帯	×	×	×	×	×	11.0%	7.8%	71%	73%	32.02181
2011	平泉	×	構成資産	○	×	×	○	×	0.0%	3.4%	147270%	0.01km ² 増加	1.93579
			緩衝地帯	○	○	×	○	×	55.0%	32.3%	68%	26%	62.48969
2013	富士山	×	構成資産	×	○	×	×	×	0.1%	0.0%	5%	0%	208.63511
			緩衝地帯	×	○	×	×	×	7.5%	2.8%	72%	29%	496.32348
2014	富岡	×	構成資産	×	×	×	×	×	2.0%	0.0%	0%	0%	0.06474
			緩衝地帯	×	×	×	×	×	17.8%	10.4%	0%	59%	4.20498
2017	沖ノ島	×	構成資産	○	○	○	○	○	5.9%	7.9%	67%	0%	1.24473
			緩衝地帯	○	○	○	○	○	27.3%	24.8%	89%	99%	52.13872
2018	長崎	▲集落	構成資産	○	○	○	○	○	9.1%	12.2%	224%	45%	55.46328
			緩衝地帯	○	○	○	○	○	29.3%	17.0%	80%	31%	26.02225
2019	百舌鳥	×	構成資産	×	○	○	○	○	6.6%	1.2%	18%	0%	1.68919
			緩衝地帯	×	○	×	○	○	24.3%	2.2%	8%	0.03km ² 増加	8.88721

注) OUV: Outstanding Universal Value. 世界遺産の名称は省略して記載。

Abstract: In Japan, 16/20 World Cultural Heritage sites include agricultural lands, and all of their OUV are buildings and other structures. since 2005, a comprehensive management plan has been required to register a World Cultural Heritage site, but no evaluation system exists for agricultural lands responsible for current production in World Cultural Heritage sites. The purpose of this study is to clarify the evolution and position of agricultural land in World Heritage areas and to discuss the role of agricultural land in World Heritage nomination documents. An important factor in agricultural land area change is geographic characteristics. A larger area of agricultural land tended to lead to more descriptions of agricultural land in nomination documents. Agricultural land is expected to serve as an element in maintaining good "landscape." Only one site evaluated agricultural land as a livelihood. Even in that site, the agricultural promotion aspect refers nothing to the World Heritage site." If evaluated both as "production" and "a component of the World Heritage Area," "agricultural land" could serve as an intermediary. The establishment of a link between the components and agricultural land is important for the survival of the World Heritage Area.